

多種多様な発送業務の基盤に“止まらない”エッジサーバーを採用 迅速な導入と高い可用性がシステム運用管理業務の負荷を低減

株式会社 ジップ



Smile Communications for tomorrow

ZIP

株式会社 ジップ

岡山県瀬戸内市に本社を構え、学習教材や通販商品、ダイレクトメールなどの発送代行をサポートする物流支援サービスを中心とするビジネスを展開。ベネッセコーポレーションをはじめ通信販売会社、量販店などを顧客に、物流支援に加えて、販促支援、BPOサービスまで、ダイレクト・マーケティング・ソリューション企業として独自のポジションを築き上げている。



今回の導入の決め手は？



24時間365日業務を“止めない”
無停止型サーバー



10年間の長期保守と
充実したサポート



トータルコスト
パフォーマンス

1 万が一故障しても業務を止めない、現場で運用できる無停止サーバー

2 導入もスピーディーで簡単、システム管理者の業務負荷を画期的に改善

3 各拠点に乱立するサーバーを順次刷新し、業務の効率化を実現

ベネッセコーポレーションをはじめ 多様な顧客に物流支援サービスを提供

株式会社ジップは発送代行など物流支援サービスを中心とするビジネスを展開する企業だ。設立は1991年。「進研ゼミ」で親しまれるベネッセコーポレーションの

学習教材やDMの発送代行からスタートし、そこで蓄積したノウハウを生かして、通信販売会社や量販店などのサポートへと事業を拡大してきた。現在は、物流支援に加えて、販促支援、さらにはコールセンターの運営や顧客データ管理などのBPOサービスまで、ダイレクト・マーケティング・ソリューション企業として独自のポジション

を築き上げている。年間に扱う発送物の数は約3億通にも達し、商品発送やDM発送などの物流支援ならジップが良いという評判が広く浸透。顧客企業からの問い合わせも増えている。

その事業の強みについて、代表取締役社長の三鍋英治氏は次のように語る。

「早くから機械の自動化やソフトウェアの自社開発に取り組み、ノウハウを蓄積しながら独自のシステムを構築してきました。それが大きな強みになっています。現在、岡山県を中心に福岡や埼玉など約20の事業拠点を展開しています」

顧客企業の数も多く、たとえばDMであれば毎月2000万通以上、しかも数千の封入パターンで発送。多種多様な封入、印字機、手作業ラインで顧客企業の“届けたい”想いを実現している。その大量かつ複雑な発送業務の作業品質を担保しているのは自社開発のシステムだ。

その開発から運用管理まで担う開発本部を統括する成友進氏は次のように話す。

「基盤管理の中でも非常に重要となっているのが、発送業務を管理するITシステムです。ところが、事業の拡大に対応して随時サーバーを増強してきたため、各拠点にサーバーが乱立し管理が徹底されず、運用面もコスト的にも非効率という課題に直面していました。もしもサーバーに障害が発生して長時間にわたって停止してしまった場合、業務に重大な影響が及ぶ可能性があり、早急に解決したい課題でした」



株式会社 ジップ
代表取締役社長

三鍋 英治氏

「ITインフラに関わる社員は、当社にとって欠かすことのできない人材です。IT人材の採用が容易ではない今、これらの社員の業務効率を高め、本来の力を発揮できる環境を整えていくことは非常に重要であると考えています」

個人情報扱うためサーバーの設置は オンプレミスでの運用が必須

たとえば、商品発送を管理するシステムでは、各事業

拠点に専用のサーバーを設置。顧客側から送られてくる出荷指示データなどを加工し、各種帳票などを作成する。さらに、作業現場にあるPCにデータを引き渡し、作業員が宛先と商品の照合などの検品を行っている。

これらのシステムでは、発送業務の仕様が顧客ごとに異なる上、クリティカルな個人情報を取り扱うために万全のセキュリティも要求される。そのため同社では、主要な顧客ごとに専用のサーバーを用意し、オンプレミスで運用している。また、1顧客あたり、多い場合には1日に2万件以上の発送を行っており、サーバーには高度な可用性が求められる。

「従来、プラットフォームには一般的なIAサーバーなど安価な製品を使用し、故障に備えて拠点ごとに代替機を用意していました。障害が発生した場合には、私たちが現場に駆けつけて手作業でサーバーの切り替えを行わなければならない、その間の発送業務が止まるリスクだけでなく、基盤管理の業務面での負荷も大きいという課題があったのです」

このように話すのは、開発本部の白石沙織氏。開発本部には20名強の社員が在籍しており、その大半はIT関連に携わる。しかし、サーバーなどインフラ管理を担当する社員は白石氏を含めて2名。障害発生時には白石氏らが通常の業務を中断し、アプリケーション担当のSEを伴って緊急出動しなければならない。IT人材が不足する今、同様の課題に直面する企業は多いのではないだろうか。

「各拠点で複数の業務サーバーが稼働していたので、結果的に毎月どこかでトラブルが発生して、その度にスケジュールを調整して奔走していました。さらに遠隔地の拠点はたいへんです。埼玉の拠点の場合、委託先にサーバーを設置しているという環境もあり、障害が発生した場合、岡山から私たちが新幹線に乗って出張して対応しなければなりません。本番環境とバックアップ環境の同期がとれていなかったりすると復旧作業も困難で、その間、システムはストップしたままになってしまいます」(白石氏)

そこで同社では2020年夏、サーバーの刷新を検討することにした。そして選択したのが、ストラタステクノロジーのztC Edgeだった。

人的リソースを含めた投資効果を検討し、 ztC Edge の導入を即断する

ストラタスのztC Edgeは、24時間365日“止まらない”可用性を実現するエッジサーバーだ。あらかじめ冗長化された2台のノードで構成されて、片方のノードに障害が発生した場合でも、自動的に安全なノードへと処理を

切り替え、無停止で稼働を継続する。故障交換もプラグインで簡単。ITの専門知識がいらず、現場のメンバーで扱えるゼロタッチ運用を実現する。さらに、ztC Edgeは10年間の長期保守を提供しており、長年にわたって安心して利用できる。そのztC Edgeを採用することになった経緯について白石氏は次のように話す。

「ある展示会でztC Edgeに出会いました。もし故障が発生しても、業務が止まらない高可用性に興味を持ちました。さらに惹かれたのは、10年間という長期保守です。IAサーバーでは、保守期間は5年から長くても7年程度が一般的です。工場など、過酷なエッジ環境向けのサーバーでありながら、10年保証という期間の長さ、ストラタスの製品への自信を感じました」



株式会社 ジップ
開発本部 本部長

成友 進氏

「ztC Edge のコストパフォーマンスは、担当者の負荷軽減などトータルで考えると非常に優れていると思います。ztC Edge を業務・DB サーバーの標準機として位置づけ、今後も順次導入していきます」

いくつか他社サーバーとも比較はしたが、検討はトントン拍子で進んでいったという。大きなシステムを設置してセンターから統合管理することも検討したが、ネットワークに障害が発生すれば業務に影響が発生する。各拠点の多種多様な発送業務を支えるシステム基盤は、現場に近いところで運用したい。ztC Edgeなら万が一故障しても業務は止まらないため、駆け付ける必要もない。ztC Edgeを分散させて配置する方が最適と判断した。

もちろん、導入検討にあたっては投資対効果が重要な要素となる。導入にあたって最終的な判断を下した開発本部長の成友氏は語る。

「“思ったより高くない”というのが見積を見た時の第一印象でした。IAサーバーなどと比較すれば高価に見えますが、一般的なサーバーでは障害時に備えてバックアップの代替機も用意しなければなりません。5~6年で入れ替えが必要になるので、その度にイニシャルコストも手間もかかります。それに加えて、障害発生時にかかる人的コストを考慮すると、10年間の使用を想定した

トータルコストは十分に投資対効果に見合うソリューションだと判断しました」

セットアップもすべて自社の社員で 導入時のサポートも充実

こうして同社がztC Edgeの導入を決定したのは2020年12月のことだった。そして3カ月後の2021年2月、直近の課題となっていた埼玉の拠点への導入が完了し、ztC Edge 第一号機の稼働がスタートした。このように、導入までの構築作業がスピーディーで容易なこともztC Edgeの大きな特長だ。セットアップもすべて同社の社員で行ったことがそれを裏付けている。その感想を実際に携わった白石氏は次のように語る。

「ストラタスの担当者からセットアップも簡単という話を聞いていたので自分たちでチャレンジしてみることにしました。不明点などについては丁寧に相談にのってくれて、実際、導入は難しいこともなくとてもスムーズでした」

また、ztC Edgeでは万が一障害が発生した場合、故障ノードの交換も簡単で、ユーザーが自分たちで行うことが可能だ。

「ノードの交換も、導入時に試してみました。ノードを入れ替えてケーブルを入れるだけで自動的に再同期して冗長構成に戻る。交換作業中もシステムは動き続けます。本当に簡単に驚きました。とはいえ、そんなことを実際に経験する事態にはまだ一度も遭遇していないのですが」

このように白石氏が話すように、ztC Edgeは稼働から約1年半が経過した現在まで一切トラブルがなく無停止で稼働している。



株式会社 ジップ
開発本部 開発部 ITインフラ開発T

白石 沙織氏

「導入して1年半が過ぎた現在まで、障害もなくずっと無停止で稼働しています。万が一、故障しても業務システムは止まらないので、拠点に駆け付ける必要がない。安心して本来の業務に集中できます」

“止まらない” 実績を高く評価し、 今後は標準機として ztC Edge を順次展開

このような“止まらない”実績を高く評価し、同社ではその後も ztC Edge を順次導入。現在では4セットが稼働し、さらに2セットの導入を進めているところだ。ztC Edgeにあらかじめ組み込まれた仮想化機能を使って、複数のサーバーをztC Edgeに統合できた拠点もある。また、サーバーの設置環境は多様なため、ファンレスという構造は事務所などに設置した場合も静粛で快適性を損なわないというメリットにも気づいた。今後、同社ではztC Edgeを標準機としてDBサーバーや業務サーバーの刷新を進めていくという。

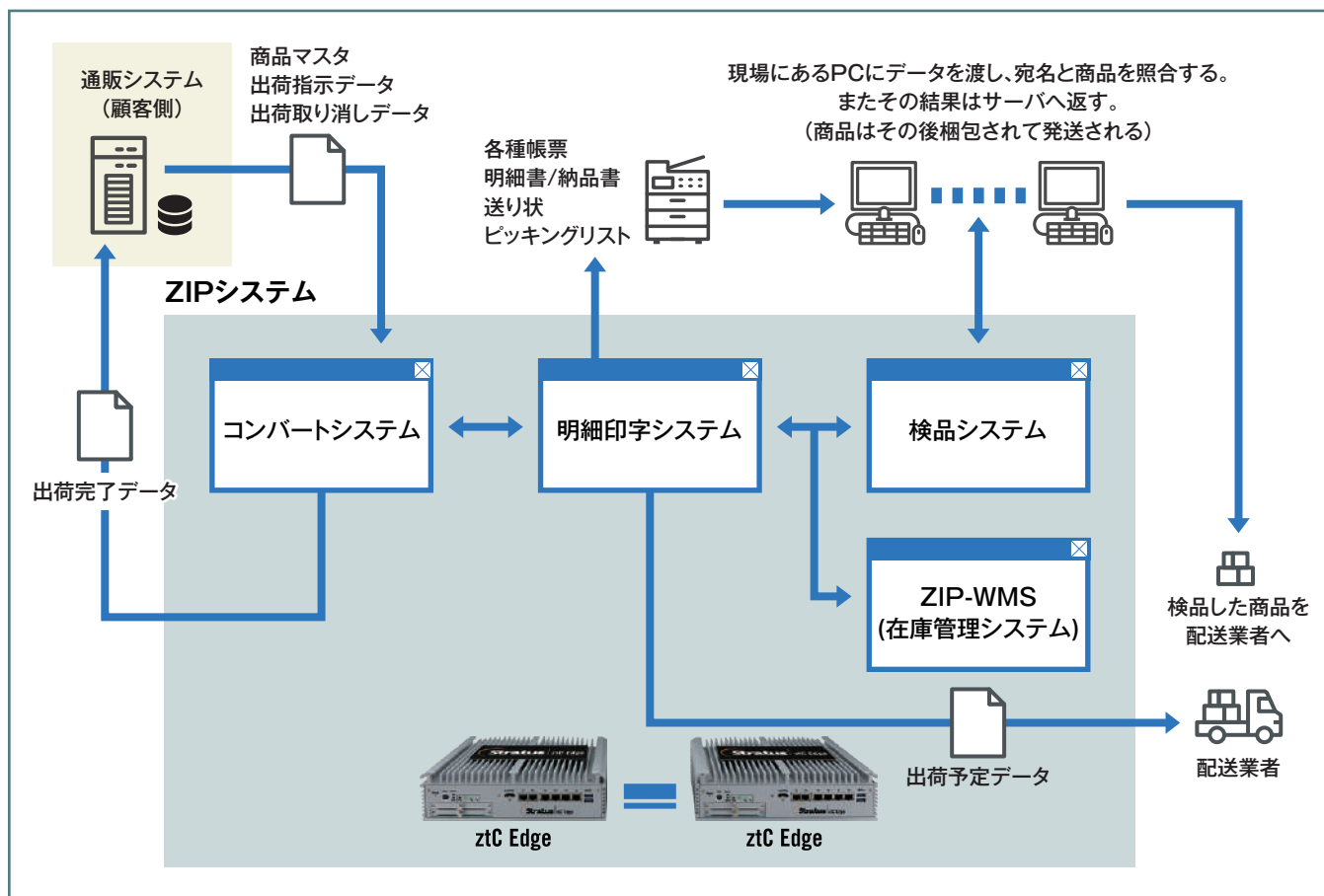
「無停止によって発送業務の効率が高まったのはもちろんですが、担当者の負荷が大幅に軽減されたことが大きい。開発本部は基盤を支えるだけでなく、設備や新しい技術を取り入れ、ITシステムを中心に、会社の成長を支えることがミッションです。DXの推進や人材

の育成といったより創造的な業務に力を注げるようになりました」

開発本部長の成友氏は、ztC Edgeの導入の効果について、このように話す。また、今度のIT戦略について、社長の三鍋氏は次のように語る。

「当社がこれからさらに成長していくためにはDX戦略の推進が欠かせません。その一環として、RPAやAIをテーマにしたワークショップを行うなど、社員たちのITリテラシーを高めるための活動を進めています。また、IT基盤の強化も継続して取り組んでいくべき重要な経営課題です。ztC Edgeの導入によって、担当者たちの業務が大幅に改善されたという話は何度も直接聞いています。今後もストラタスの製品には期待したいと思っています」

ストラタステクノロジーは、“止まらない”ソリューションによってその期待に応え、成長を続ける同社の事業戦略をこれからも支援していく。



日本ストラタステクノロジー株式会社
<https://www.stratus.com/jp/>

〒102-0085 東京都千代田区六番町6 勝永六番町ビル
 TEL : 03-3234-5562 E-mail: marketing.jpn@stratus.com

本記事は2022年6月に行った取材をもとにしたものです。

Stratus, Stratusロゴ, ztC Edge, ztC Edgeロゴ, Stratus Technologiesロゴは、Stratus Technologies Bermuda Ltd.の登録商標または商標です。その他、本資料の文中に引用された社名、製品名、サービス名については、各々の会社の登録商標ないしは商標であり、各所有者が商標権を保持しています。Copyright © Stratus Technologies Bermuda Ltd. & Stratus Technologies Japan, Inc, All rights reserved.